

令和7年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	24	学校名	伊豆の国特別支援学校 伊豆下田分校	校長	松本仁美
------	----	-----	-------------------	----	------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果○と課題●
安全・安心	生命の尊さや人とのつながりを大切に、一人一人の良さを受け入れ、互いを思いやる心の醸成	・各学部の経営計画に基づき、児童生徒の命が守られていると答える教職員や保護者 (AB100%)	・マニュアルの見直しや防災備品の整備を継続して実施した。 ・安全体制や報告体制を意識し、大きなケガや事故はなかった。 (AB100%) (保護者 AB90%)	B	○下田小学校と合同研修をもち、継続的にマニュアルの見直しと防災体制を検討整備することができた。 ●引き続き防災や緊急時対応等、より実践的な学習や体制整備をしていく。
		・信頼できる教職員に向けて、自身の行動を振り返ることができた教職員 (AB100%)	・人権チェック等で自己やお互いを振り返ることができた。 (AB100%)	A	○児童生徒や教職員に対して人権に配慮した行動がとれている。 ●引き続き、研修や事例紹介を通して教員間で客観視や助言し合える雰囲気を作るようにする。
	命のつながりを実感する食育の推進	・給食センターと連携し、食育指導や安全な給食提供ができたと答える教職員及び保護者 (AB90%)	・給食センターと連携し、安全な給食を提供することができた。 (AB100%) (保護者 AB100%) ・食育教室・掲示・食材・本の読み聞かせを通して、食育を推進した。 (AB94%)	B	○気になったことは、すぐ声を上げ、給食センターに連絡し確認することが定着している。 ○児童生徒の食材やメニューへの興味や関心が高まった。 ●児童生徒の実態に合わせて、6つの食育の視点をより意識していく。
児童生徒の命を守る安全教育の充実	・緊急時の対応や防犯防災訓練をとおり、自分の身の守り方を学んだ児童生徒・教職員 (AB80%)	・実践的な訓練、専門家の講義や助言を受けて、児童生徒・教職員ともに、安全を守る行動を身につけることができた。 (AB100%)	A	○毎月の訓練が定着した。 ○災害時の自助力の目標を児童生徒個々に設定して、訓練に取り組むことができた。 ●今後も訓練を繰り返して、発災時は全教員が迅速に役割を分担し、的確に動けるようにする。	
専門性	主體的・協働的・深い学びによって、資質・能力を育成する授業実践	・ラーニングマップ等の活用による授業づくりを行い、実践後に授業改善を進めた教員 (AB90%) ・児童生徒の実態と学びを見取り、適切な目標設定と評価ができた教員	・ラーニングマップを活用しての実態把握と適切な目標設定をすることができた。 ・一人一授業では、複数の教員で見合い、助言を受けて改善授業を実施した。グループ研修でも活発に意見交換と評価ができた。 (AB100%)	A	○生活に繋がる視点を意識することで、より適切な目標設定につながり、児童生徒の理解が深まった。 ●教員の授業力には差があり、もっと授業づくりや教材研究を練り合う研修が必要である。 ●生活への繋がり意識したが、評価までには至っていない。次年度は、生活や他教科への繋がりをふまえて、評価・検討ができるように、効果的な研修の持ち方等を

様式第3号

		(AB90%)			見直す。
特別支援教育の専門性の向上		・障害の特性に応じた支援や学習指導要領に基づく研修ができた教員 (AB90%)	・障害特性やコミュニケーション、身体機能、ICTにおいて、専門家を招いて研修を行った。 (AB100%)	A	○専門家の助言や研修内容を共有して、実際の生活や指導に生かすことができた。 ●来年度も、指導ニーズに合った講師招聘や専門分野の研修を精選して実施する。
		・PCやタブレット等の活用により、授業準備の効率化や学習の定着に効果を得た教員 (AB80%)	・PCやタブレット活用は増加し、授業準備や授業で効率的に活用している。 (AB100%)	B	○教職員の授業や資料準備におけるAIの活用が増加。有効な活用情報を共有している。 ●重度の児童生徒の学習場面において、ICTの効果的な活用方法や実践を共有していく。
キャリア教育の視点で小中学部、高等部のつながりと、児童生徒の願いや夢を大切にしたい進路指導の充実		・小中高の系統性や将来を意識して指導できた教員 (AB90%)	・生活年齢や高等部卒業後を想定する必要性を意識することができた。 (AB100%)	B	○研修や情報から、教職員の進路指導の知識は増加した。 ●知識をもとに、生活年齢や卒業後を意識し、そのために今と数年後に必要な課題を、保護者とともに段階的に考えて指導する。
		・児童生徒に応じた適切な情報提供や、進路指導ができたと答える教員及び保護者 (AB90%)	・中学部では進路学習の中で、高等部のZOOMによる見学を実施した。 ・保護者向けに、PTA進路学習会や、保護者教職員向けに、福祉事業所の進路見学を実施した。 (AB100%) (保護者 AB94%)	A	○保護者が、進路先の一つである高等部の進路指導主事の話の聞いたり、福祉事業所を実際に見学したりすることは、児童生徒の夢や願いを考える上で有効だった。 ●情報提供や研修・見学の機会を設定するが、保護者の意識には差がある。地域の資源も十分ではない。保護者の意識を高める働きかけや支援が必要である。
連携 地域住民との協働を推進し、地域と共に歩む学校づくり		・各学部において、適切な交流を計画し、地域に貢献できたと感じる教職員 (AB85%)	・下田小学校、交流籍を活用した居住地校交流、地域の高校との交流を積極的に進めることができた。	A	○分校児童生徒が交流を楽しみにし、交流先の児童生徒の共生への意識の成長も感じられた。継続することで、相手校の理解も深まっている。 ○地域交流では、児童生徒が意欲的に地域に出て行き活動する姿が見られた。 ○地域も友好的に受け入れ、地域の活性に向けて共に活動したいという思いをもってくれている実感がある。 ●分校児童生徒が減少する中、地域を活用した学習において「地域にどのような貢献ができたか」を
		・地域の資源や人材を活用した学習活動をとおして、児童生徒が意欲的に学んだと感じる教職員及び保護者 (AB85%)	・8つの地域資源を新規に活用した。 ・中学部は「開国の地」をテーマに、下田と横浜(修学旅行先)に関係した地域学習を実施した。 ・中学部は作業製品を媒介に、地域の観光施設や福祉施設と積極的に交流することができた。		

様式第3号

			(AB100%) (保護者 AB100%)		検証し、さらなる活動を検討していくことが必要である。
チ ー ム 学 校	特別支援学校のセンター的機能の充実及び関係機関との連携の強化	・センター的機能による成果の整理及び検証（毎学期）	・賀茂地区の幼保園小中高からの依頼に対応。依頼数が増加した。 ・見学や支援、会議、講義等、ニーズに合った支援ができた。(AB100%)	A	○5人の教員が校外の支援にかかわった。支援を担う教員を新規に1名増やすことができた。 ●引き続き依頼への支援に終わらず、地域の特別支援教育の課題改善につながる支援内容や工夫を検討する。
		・学校内外の情報共有と、支援会議やケース会議等での案件の整理及び成果の検証（毎学期）	・地域の関係機関や支援者と連携して、校内のケースに対応した。(AB100%)	A	○校内ケースでは、関係機関と連携して、課題解決につながるケース会を迅速に実施できた。
	教職員一人一人が責任をもった業務遂行と、やりがいを感じる働き方の推進	・キャリアステージと自己評価シートに基づき、自身の役割を理解して分掌や学部学年の運営等に携わった教職員 (AB90%)	・少人数の分校なので、一人が複数の役割をもって業務に当たり、経営に参画した。(AB100%)	A	○自身のキャリアステージや役割を考えることが定着した。 ○初任者の存在で、人材育成を意識する教員が増えた。 ●少人数の分校なので一人が複数の役割をもっている。よって業務の精選と優先順位を付けていく。
		・計画的な業務遂行のために努力し、働き方を改善できた教職員 (AB100%)	・働き方や効率を見直し、長時間勤務の教員はいなかった。 ・A24% B76%と、改良改善の余地は多い。(AB100%)	B	●教職員数の減少に向けて、教員が個々の業務改善とともに、校内業務全体を見て、今までの踏襲ではなく、効率化を考える視点をもつことが必要である。